



物語談話における文法と談話構造

著者	奥川 育子
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102乙第2732号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00126151

氏 名（本 籍）	奥 川 育 子
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2732 号
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	物語談話における文法と談話構造
主 査	筑波大学 教 授 博士（言語学） 砂川有里子
副 査	筑波大学 教 授 Ph.D.（言語学） 竹沢 幸一
副 査	筑波大学 教 授 文学博士 廣瀬 幸生
副 査	筑波大学 教 授 博士（人文科学） 一二三 朋子
副 査	筑波大学 准教授 博士（言語学） 石田 プリシラ・アン

論 文 の 要 旨

本論文は、日本語母語話者と日本語学習者のそれぞれが産出した日本語による物語談話の比較や、日本語母語話者の日本語による物語談話と英語母語話者の英語による物語談話との比較を行うことにより、文法と談話構造の観点から日本語の物語談話の特徴について考察することとを目的とする。

本論文で使用するデータは、言葉のない 5 分程度のアニメーションを視聴した後にそのストーリーを書いた母語話者と学習者による 800 字程度の日本語作文と、母語話者による 1000 語程度の英語作文である。本論文では、学習者と母語話者による日本語作文、あるいは、母語話者による日本語作文と英語作文を比較対照することを通じて、日本語の物語談話の文法的な特徴、日本語学習者の物語談話の問題点、日本語と英語の物語談話の違い、日本語母語話者と英語母語話者の認知言語学的な動機の違いなどについて考察される。

本論文は以下の 8 つの章で構成されている。

序章 本研究の背景と目的

第 1 章 物語談話とは何か

第 2 章 分析のデザイン

第 3 章 指示表現と助詞ハとガの選択

第 4 章 視点

第 5 章 連体修飾節

第 6 章 時制転換

終章 結論

序章では、本論文の背景と目的が示される。

第 1 章では、「談話」という概念の定義がなされ、話し言葉と書き言葉のどちらに対しても「談話」という用語を用いることが述べられる。また、話し言葉と書き言葉の違いが論じられ、本論文の対象

を書き言葉に限定することの理由が示される。さらに、談話分析に関する先行研究の紹介が行われ、本論文の拠って立つ認知機能主義言語学について論じられる。

第2章では、本論文の調査概要とデータの分析方法が示される。

第3章では、日本語母語話者の主題展開のしかたと日本語学習者の主題展開の習得のありさまを、指示表現の選択、助詞ハ・ガの使用状況、主題の導入や展開の仕方といった観点から調査し、‘current’、‘known’、‘new’ という三種の文脈において母語話者と学習者がどのような指示表現を用いているかを検討する。その結果、current context の場合、母語話者が「省略」や「NPハ」を用いるのに対し、学習者が「省略」を過剰使用したり「NPガ」を用いたりしていること、new context の場合、母語話者が「NPガ」を使用するのに対し、学習者が「NPハ」を使用する傾向にあることなど、母語話者と学習者の違いが明らかにされる。さらに、「NPハ」のほうが「NPガ」よりも早く習得されるという現象について「主題の普遍的卓立」という観点から考察される。

第4章では、物語談話での登場人物を表す表現について、「視点」という観点から母語話者と学習者の談話が比較され、その違いが記述される。具体的には、登場人物を談話に導入するとき、母語話者はその人物をガでマークし、注視点をその人物に移動するが、視座は一貫して主人公に置かれるのに対し、学習者は注視点を新登場人物に移動することも視座を主人公に固定させることも行っていないこと、および、このような現象が学習者の母語や日本語の習得状況の違いにかかわらず観察されることが示される。また、これらの結果から、「注視点の登場人物への移行」と「視座の主人公への固定」が日本語学習者にとって習得の難しい問題であることが論じられる。さらに、この問題について、日本語母語話者が「主観的事態把握」を行うのに対し、日本語学習者が「客観的事態把握」を行うという事態把握の様式に異なりがあり、それが学習者の日本語らしくない談話の原因になること、そして、より日本語らしい談話展開を行うには「主観的事態把握」を行うことが不可欠であることが述べられる。

第5章では、物語談話に現れる連体節の類型と機能について考察され、「談話展開型連体節」と「情報付加型連体節」という二種の連体節が物語談話に用いられること、「談話展開型連体節」が主人公や主要人物を主名詞にとり、主節に対する情報付加を行いながら時系列にことを重ね、その人物に関わる談話をスムーズに展開する機能があるのに対し、「情報付加型連体節」は、さほど重要でない人物を主名詞にとり、その人物に関する背景的な情報付加を行う機能を持つものであることが述べられる。また、「談話展開型連体節」は習得が難しいのに対し、「情報付加型連体節」は習得しやすいという先行研究での指摘が本論文でも確認されたことが述べられる。さらに英語の物語談話における関係節の調査が行われ、日本語と同様に「情報付加型連体節」が用いられるが、英語では主人公が主名詞となりうる点で日本語と異なることや、日本語にはない「追叙用法」と呼ばれる連体節が観察されることが述べられる。

第6章では、物語談話における時制転換について、「前景情報である出来事に過去形が使用されるのが無標である」という仮説を立てた上で、日本語と英語の時制形式の分析が行われる。その結果、日本語では物語の設定や方向付けなどの背景的事象で非過去形が使用され、出来事などの前景的事象で過去形が使用されるのが無標で、仮説に即した結果が得られたのに対し、英語では、背景的事象だけでなく、前景的事象でも、ほとんどの場合に非過去形が用いられるという調査結果が示され、調査対象データの特殊性について論じられる。

終章では、本論文の意義について、日本語教育への示唆という観点から論じ、残された課題と今後の展望が提示される。

審 査 の 要 旨

日本語学習者の作文には、語彙や文法の点では間違いが見当たらないのに、意味が通じにくいと感じたり、表現の仕方が不自然だと感じたりする 경우가少なからずある。このような場合の多くは、談話の中での文法の運用の問題に起因する。本論文はこの種の問題を取り上げ、一連の物語を述べる際の書き言葉における文法の運用について考察する。その方法として、日本語母語話者と学習者の日本語作文の比較と、日本語母語話者と英語母語話者のそれぞれの言語による作文の比較という2つの方法を使用し、その両側面から物語談話の展開に関わる日本語の文法的な特徴の解明を試みる。取り扱われる文法事項は、①指示表現と助詞ハとガの選択、②視点、③連体修飾節、④時制転換と多岐にわたるが、いずれも緻密なデータ分析に基づいた実証的な考察が行われており、それぞれの文法事項に関して日本語の物語談話に特徴的な文法の指摘が数多くなされている。また、「主観的事態把握」と「客観的事態把握」という認知機能言語学的な概念に関して、日本語母語話者は「主観的事態把握」を好むという先行研究での指摘を取り上げ、上記の①と②の分析を実証的に行うことにより、物語談話における文法運用という側面からこの指摘を支持する新たな証拠を加え、理論の補強を行った点、および、物語談話における連体修飾節や時制転換の運用に関して日本語と英語の違いを明らかにした点など、評価すべき点の多い意欲的・挑戦的な研究であると言える。

一方において、論文全体を通じた方法論の統一が必ずしも図られていないという点や、分析対象が物語談話というジャンルに限られており、本論文での知見が他のジャンルにまで一般化しうるかどうかについての考察がなされていない点では課題が残る。しかしながら、この課題はこの研究が今後さらに発展する可能性の現れであり、本論文の価値をいささかも損ねるものではない。本論文は、談話における文法の運用という問題に関して、物語談話という側面から興味深い数多くの知見を提供しており、言語学の領域における貢献のみならず、日本語教育の領域にも応用可能な研究として評価できる。今後のさらなる発展が期待できる優れた論文である。

平成 27 年 1 月 20 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（1）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。